

[河川・海浜敷の緑化に向けた樹種の選定]
ルーピング抑制資材・コンテナ培土の検討

佐藤澄仁・長嶋大貴
(緑化森林科)

【要約】コンテナ用土を単純な組成として経費を抑えることは生育を抑制する。また、スリットや障壁など根域のルーピングを抑制するコンテナは一定の効果が期待できるが、3年程度の育成で出荷を考慮するのであれば安価なポリポットが有効である。

【目的】

都市緑化にはヒートアイランド現象等の都市環境緩和効果や都市生活者のアメニティ効果が期待されている。一方、都市の肥大化傾向で緑化スペースは狭小化し、求められている緑化に十分応えているとはいえない現状である。また、公共工事の減少や景気の低迷により緑化植物の需要は減少している。そのため、新たな緑化空間を見出し、その環境に対応できる樹種を選定し、新たな需要を生み出すことが植木産業には必要不可欠である。

そこで、緑化可能な都市空間に対応できる樹種を選定を行うと共にコンテナ緑化植物で問題となる根域のルーピングを回避できるコンテナ資材やコンテナ用土の検討を行う。

【方法】

フイリヒメトベラ他4種を供試し、2014年7月22日に6号のコンテナに標準用土(赤土:堆肥:パーライト=5:3:1)他4種類の用土に鉢替えし、施肥は基肥として化成肥料(N:P:K=8:8:8)を5g/Lとした。また、6号のポリポット他同径の5種類のコンテナにヒメシャリンバイ他6種を供試し、標準用土(赤土:堆肥:パーライト=5:3:1)に鉢替えし、施肥は基肥として化成肥料(N:P:K=8:8:8)を5g/Lとした。調査は樹高、枝張、幹径、SPAD値を測定した。1区5反復で行った。

【成果の概要】

1. フイリヒメトベラの樹高は、標準用土で最も高く、次いで赤土9+パーライト1区、赤土7+堆肥3区の順であった。ビブルナム「イブプライス」の樹高は、標準用土で最も高く、次いで赤土7+堆肥3区、赤土9+パーライト1区の順であった。他の樹種も標準用土で若干高い傾向を示した(図1, 図2)。
2. コンテナの違いによる生育は、ヒメシャリンバイでは障壁コンテナが最終的に最も高く、次いでポリポット、スリットコンテナの順であった。フイリギンバイカではスリットコンテナ、障壁コンテナの順であった。不織布ポットは2日に1回の灌水間隔では乾燥するため生育が劣った。また、1/2深さの浅鉢ポリポットでは十分な根域が確保できず生育が劣った。また、スリットコンテナは夏期にスリット部分からの乾燥がマイナスに働く樹種がみられた(図2, 表2)。
3. 生産コストを抑えるために単純な組成を検討したが、農総研標準用土に比べ、生育が劣る樹種が多くみられ実用的ではなかった。ルーピングを抑制するコンテナでは、コンテナに鉢上げ後2年以上経つと障壁コンテナやスリットコンテナで生育が良くなる傾向ではあるが、3年程度の育成で出荷するのであれば安価なポリポットが良いと考える。

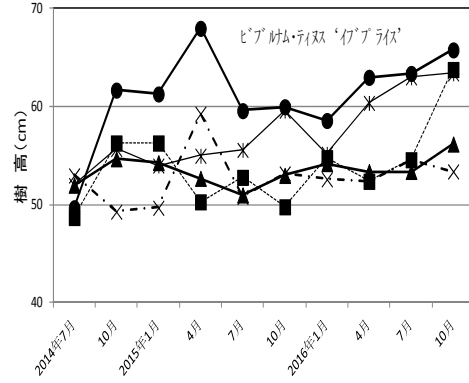
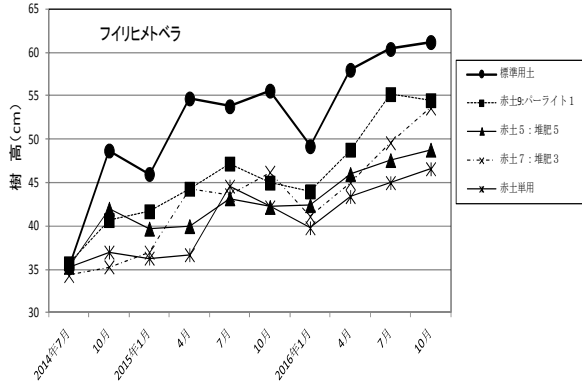


図1 コンテナ用土の違いによる緑化植物の樹高の推移

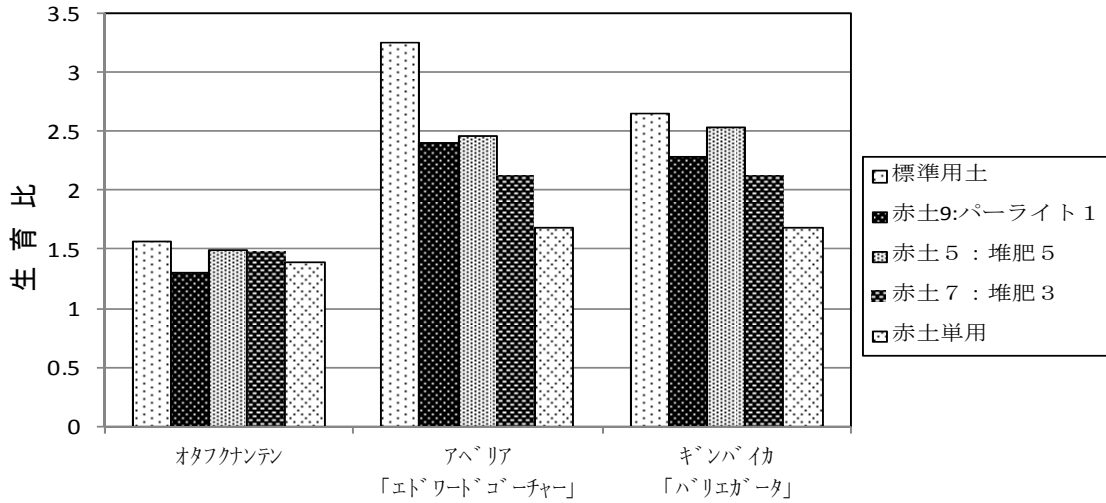


図2 コンテナ用土違いが緑化植物の樹高に及ぼす影響* * : 開始時の樹高を1とした。

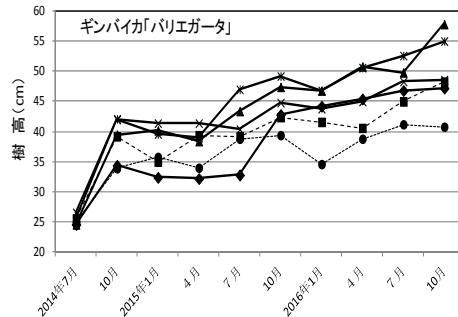
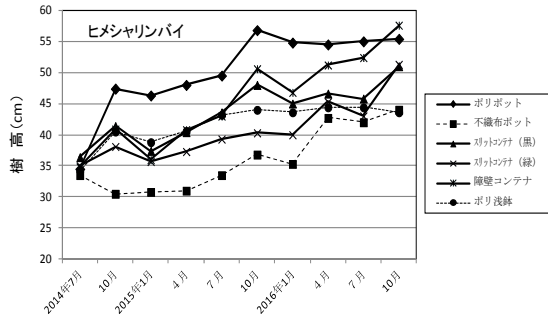


図3 コンテナの形状の違いによる緑化植物の樹高の推移

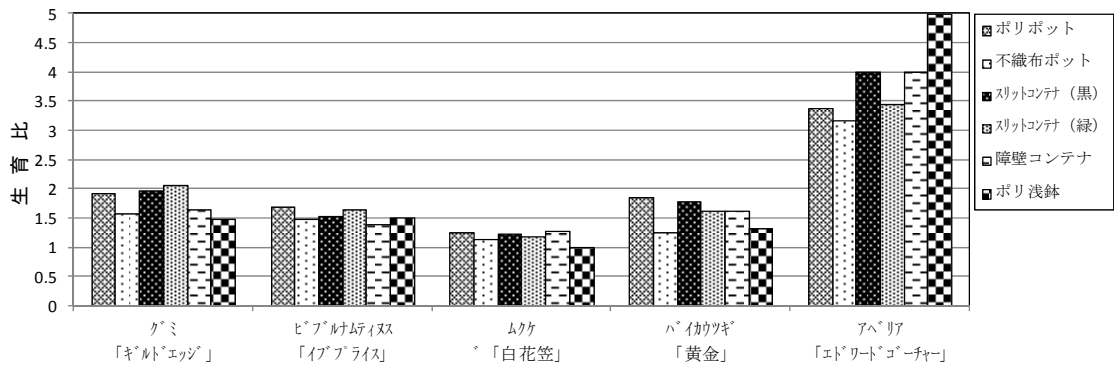


図4 コンテナ形状の違いが緑化植物の樹高に及ぼす影響* * : 開始時の樹高を1とした。